

表3 3群得点別人数

	得点	社会活動	対人関係	行動範囲	人数	計
ひきこもり群	9	3	3	3	5	13
	8	3	3	2	1	
		3	2	3	5	
		3	2	2	1	
		2	3	2	1	
中度群	6	3	2	1	2	12
		2	3	1	1	
	5	3	1	1	5	
	4	1	2	1	3	
		2	1	1	1	
軽度群		1	1	1	14	14

表4 3群の構成員について

	ひきこもり群	中度	軽度
人数(名)	13	12	14
男子	12	8	10
女子	1	4	4
平均年齢(才)	22.6	20.0	23.3
院生(名)	2	2	5
学部生	11	10	9
期間(ヶ月)	6.8	9.2	8.3

表5 ひきこもり群の重症度分類 (N=13)

	得点	社会活動	対人関係	行動範囲	人数	計
ひきこもり群	9	3	3	3	5	13
	8	3	3	2	1	
		3	2	3	5	
		3	2	2	1	
		2	3	2	1	

D. 結果

1. 3群の得点別人数(表3)

各群の得点別・項目得点別・人数を表に示した。引きこもり群は9点5名、8点6名、7点2名、計13名、中度群は6点3名、5点5名、4点4名、計12名、軽度群は3点14名であった。39例中、ひきこもり群13名、中度12名、軽度14名であった。

2. 3群の構成員の特徴(性別、年齢、学校を休んだ期間)(表4)

各群の初回来談時平均年齢は、ひきこもり群22.6歳、中度20.0歳、軽度23.3歳、学校を休んだ平均期間はひきこもり群6.8ヶ月、中度群9.2ヶ月、軽度群8.3ヶ月であった。性別はひきこもり群は男子12名、女子1名、中度群男子8名、女子4名、軽度群男子10名、女子4名であった。

ひきこもり群は大学院生2名、学部生11名、中度群大学院生2名、学部生10名、軽度群大学院生5名、学部生9名であった。

3. ひきこもり群について N=13

(1) ひきこもり群の重症度分類 (表5)

得点が9点(社会活動3、対人関係3、行動範囲3)は13名中5名であった。この5名は、登校しないだけでなく、アルバイトやサークルなどの活動も行っておらず、社会活動は全く行っていなかった。対人関係は家族以外にはなく、電話にも出ず、自宅や下宿を訪問した大学の教官や知人にも合わなかった。行動範囲も家あるいは下宿に限られていた(ただし下宿の場合は必要な買い物には出かけている)。学校を休んだ期間は12ヶ月1名、6ヶ月2名、3ヶ月1名、2ヶ月1名であっ

た。

得点が8であった6名のうち5名は社会活動と行動範囲はともに3点で、対人関係だけが2点であった。大学にも行かず、アルバイトやサークル活動もなく、行動範囲も家庭あるいは下宿に限られていたが対人関係だけは、下宿あるいは自宅を訪れた大学の知人あるいは教官との面会は拒絶しなかった。あるいは電話連絡には応じていた。8得点の残りの1名は、社会活動と対人関係は3点であったが、行動範囲が2点であった。社会活動はなく、対人関係は家族のみであったが、たまに外出をすることがあった。得点が8点の6名のうち学校を休んだ期間が6ヶ月以上は4名(12ヶ月、8ヶ月、7ヶ月、6ヶ月)、6ヶ月未満(4ヶ月、2ヶ月)が2名であった。

得点が7点の2名のうち1名は社会活動が3点で対人関係2点、行動範囲2点、他の1名は対人関係が3点で社会活動2点、行動範囲2点であった。この2例が学校を休んだ期間はそれぞれ12ヶ月と8ヶ月であった。ひきこもり群13名の内、学校を休んだ期間が6ヶ月以上は9名、6ヶ月未満は4名であった。

(2) ひきこもり群項目別出現率 (図1、図2)

面接の中で取り上げられた心理的問題を集計した。訴えのニュアンスを残すために、可能な限り本人の訴えをそのまま項目として取り上げて集計した。類似の項目をまとめるよりは、訴えの違いを区別する細かい項目に分けて集計した。たとえば勉強に関する項目としては、「授業興味喪失」、「勉強意欲喪失」、「勉強理解困難」、「立ち遅れ感」、「課題遂行不確実感」、「成績拘泥」、「成績低下衝撃」な

図1 ひきこもり群項目別出現率(その1)

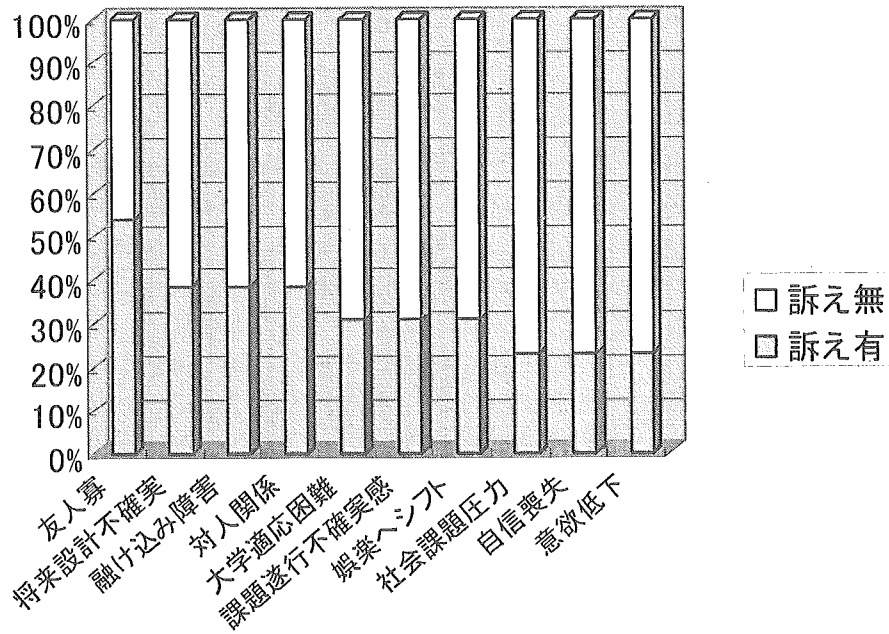
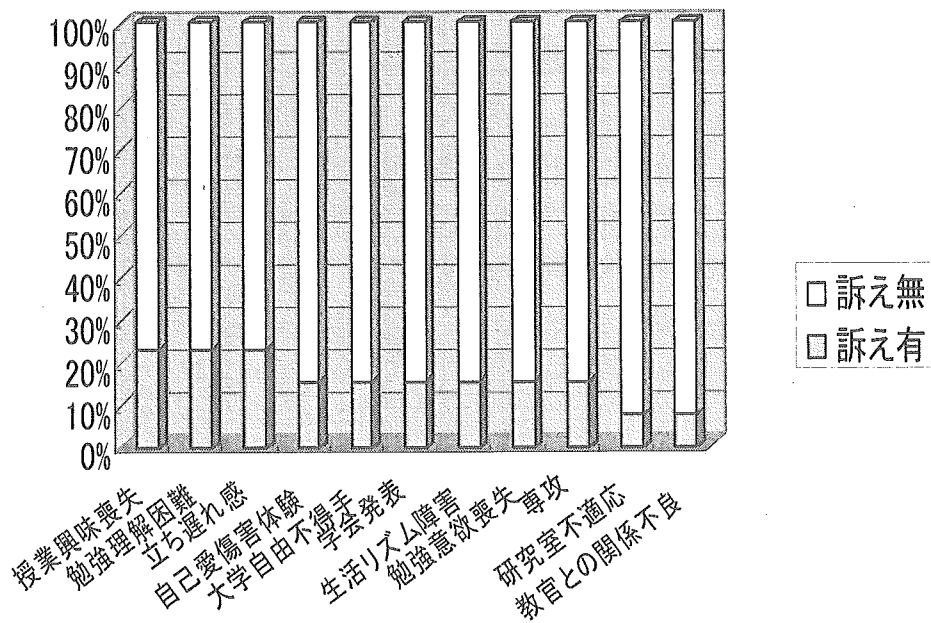


図2 ひきこもり群項目別出現率(その2)



ど、具体的な悩みとしてどのような内容があるのかを示すこと目的として細かい項目に分類した。以下に各項目の訴えが認められた事例数を示す。カッコ内は各項目の具体的な内容を示した。

「友人が乏しい」7名(54%) (大学で人付き合いはない、友人はいない)、「対人関係の問題」5名(38%)、(自分から他人に関わるのは嫌、人間関係は嫌、人としゃべらない、人見知りする)、「将来設計不確定」5名(38%) (大学でこれをしたというのではない、何がやりたいか分からない)、「融け込めない」5(38%) (周囲の人と合わない)、「大学適応困難」4名(31%) (大学の生活が肌に合わない、入学時にやる気がなくなった)、「課題遂行不確実感」4名(31%) (実験の結果が出ない、レポートが締めきりまでに出不せない)、「娯楽ヘシフト」4名(31%) (ゲーム、ネットに没頭)、「社会参加の圧力」3名(23%) (就職が決まったが自信がない、就職が決まらない)、「自信喪失」3名(23%)、「意欲低下」3名(23%)、「授業興味喪失」3名(23%)、「勉強理解困難」3名(23%)、「立ち遅れ感」3名(23%) (勉強、就職などで同級生に遅れを取っている)、「自己愛傷害体験」2名(15%) (学会発表での躓き)、「大学の自由不得手」2名(15%) (自由時間が苦手)、「生活リズム障害」2名(15%) (昼夜逆転、朝起きられない)、「勉強意欲喪失」2名(15%)、「専攻の悩み」2名(15%)、「研究室不適応」1名(8%)、「教官との関係不良」1名(8%)、「目標喪失」1名、「成績低下衝撃」1名(8%)、「成績拘泥」1名(8%)であった。

(3) ひきこもり群の項目群分類 (表6)

心理的問題の項目は内容のニュアンスを示す目的で細かく分類した。次に心理的問題の主要な傾向を知るために、類似の項目を集めて大項目を作り集計した。

以下の6項目群に分類することができた。『人間関係の問題』、『意欲低下』、『不規則な生活』、『将来設計の問題』、『勉強の負担・圧力』、『高い目標』の6群である。

それぞれの項目群に属する項目と項目の人数は表の通りである。項目群の人数を集計するに当たっては、同じ事例が二つ以上の項目に該当している場合は重複してカウントせず1名として集計した。

『人間関係の問題』:融け込めない 5名 対人関係の悩み 5名 友人が乏しい7名

『意欲低下』: 勉強意欲喪失 2名 授業興味喪失 3名 意欲低下 3名

『不規則な生活』: 朝起きられない 1名 生活リズム障害 2名 娯楽ヘシフト 4名 社会活動モードへの切替困難 1名 社会所属意識寡少 0名

『将来設計の問題』:将来設計不確実 5名 専攻の問題 2名 目標喪失 1名

『勉強の負担・圧力』:勉強理解困難 3名 課題遂行不確実感 4名 自信喪失 3名 社会参加の圧力 3名

『高い目標』:万能感 自己愛傷害体験 2名 成績拘泥 0名

各項目群の人数と%は以下の通りであった。

(図3)

1)『人間関係の問題』11名(85%)、2)『勉強の負担』7名(54%)、3)『不規則な生活』7名(54%)、4)『意欲低下』6名(46%)、5)『将来設計の問題』5名(38%)、6)『高い目標』4名(31%)であった。

4. 中度群と軽度群の結果

(1) 項目の出現率 (図4, 5)

中度群12名を対象にした集計によると心理的要素としては、「対人関係の問題」8名(67%)、「娯楽ヘシフト」7名(58%)、「勉強意欲喪失」7名(56%)、「将来設計不確実」7名(58%)、「専攻に関する悩み」6名(50%)、「授業興味喪失」5名(42%)、「友人が乏しい」5名(42%)、「融けこみ障害」5名(42%)、「意欲低下」4名(33%)、「勉強理解困難」3名(25%)、「大学適応困難」

表6 ひきこもり群 項目群別分類

項目群	項目	(人数)
人間関係	融け込み困難 5 対人関係の悩み 5 友人が乏しい	7
意欲低下	勉強意欲喪失 2 授業興味喪失 3 意欲低下	3
逸脱生活	朝起きられない 1 生活リズム障害 2 娯楽ヘシフト 4 社会モードへの切替困難 1 社会所属意識寡少	0
将来設計	将来設計不確実 5 専攻の問題 2 目標喪失	1
勉強の負担・圧力	勉強理解困難 3 課題遂行不確実感 4 自信喪失 3 社会課題圧力	3
高い目標	万能感 自己愛傷害体験 2 成績拘泥	0

図3 ひきこもり群項目群別出現率

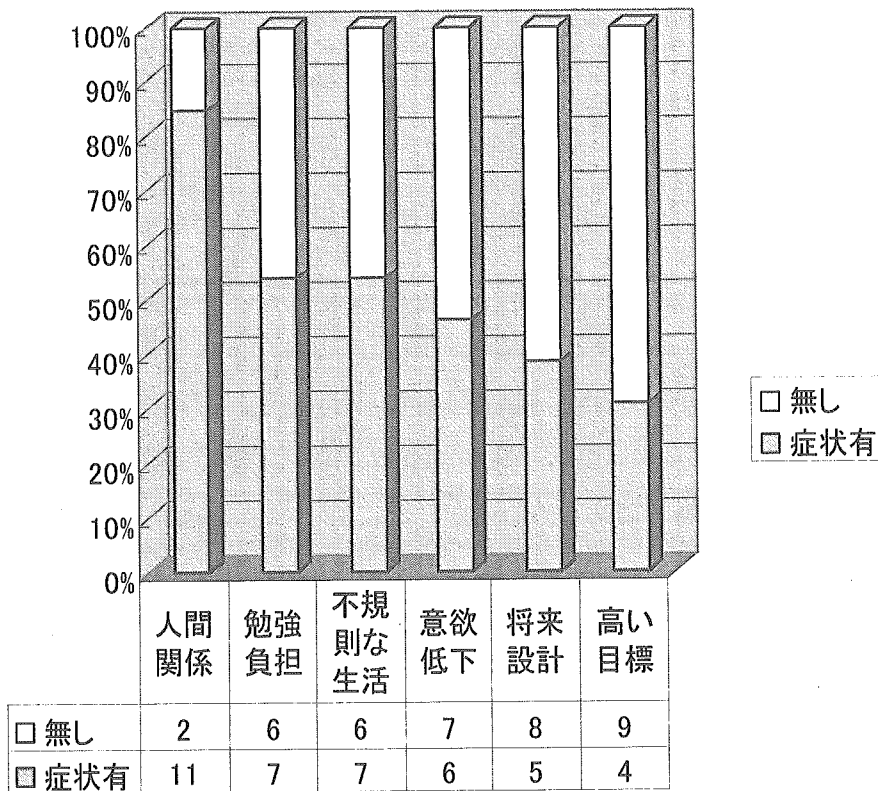


図4 中度群 項目別出現頻度(その1)

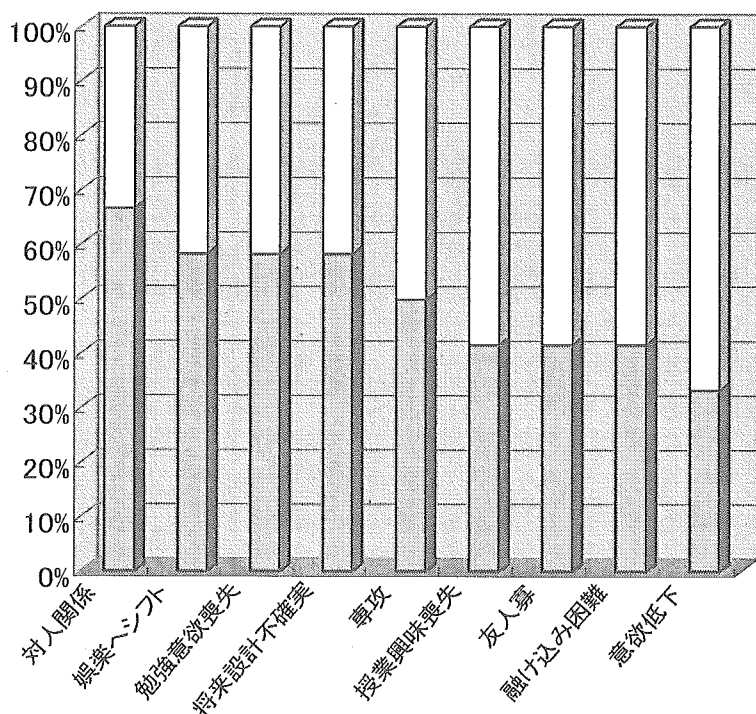
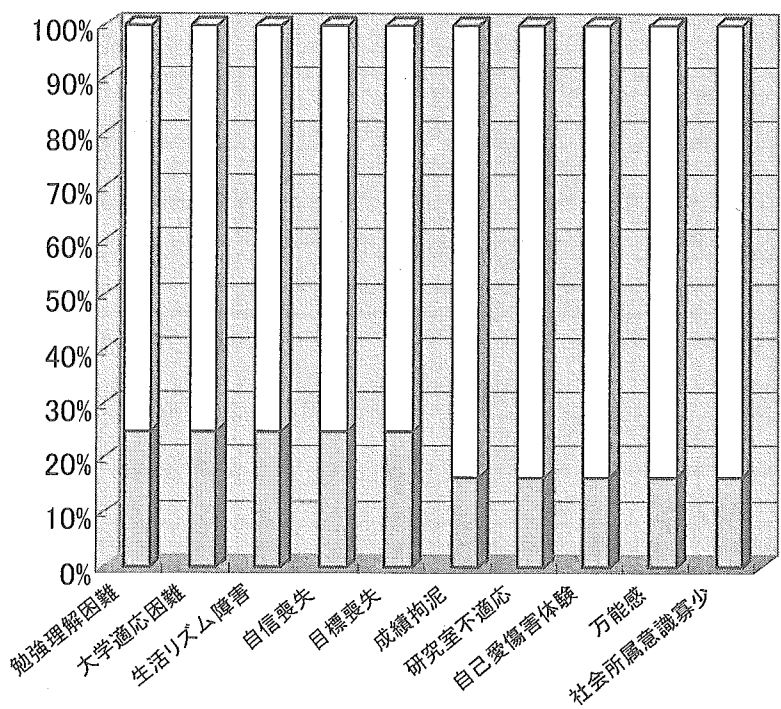


図5 中度群 項目別出現頻度(その2)



3名(25%)、「生活リズム障害」3名(25%)、「自信喪失」3名(25%)、「勉強意欲低下」4名(38%)、「成績拘泥」2名(17%)、「研究室不適應」2名(17%)、「自己愛傷害体験」2名(17%)、「万能感」2名(17%)、「社会所属意識寡少」(実家ではのんびり、大学に出て行こうと思わなかった)2名(17%)、「教官との関係不良」1名(8%)、「社会課題圧力」1名(8%)であった。

軽度群 14名を対象にした集計によると心理的要因としては(図6, 7)、「友人が乏しい」6名(43%)、「生活リズム障害」6名(43%)、「意欲低下」6名(43%)、「勉強意欲喪失」6名(43%)、「勉強理解困難」5名(36%)、「授業興味喪失」5名(36%)、「娯楽ヘシフト」5名(36%)、「専攻に関する悩み」5名(36%)、「将来設計不確実」5名(36%)、「課題遂行不確実感」4名(29%)、「大学適応困難」4名(29%)、「自信喪失」4名(29%)、「対人関係の問題」4名(29%)、「朝起きられない」3名(21%)、「教官との関係不良」3名(21%)、「社会課題圧力」2名(14%)、「目標喪失」2名(14%)、「融け込めない」2名(14%)、「成績低下衝撃」1名(7%)、「成績拘泥」1名(7%)、「他人が上」1名(7%)、「社会所属意識寡少」1名(7%)、「万能感」1名(7%)、「立ち遅れ感」1名(7%)、「研究室不適應」1名(7%)、「大学との相性」1名(7%)であった。

(2) 中度群・軽度群の項目群分類 (図8、図9)

中度群の項目群別の集計によると、1)『人間関係の問題』9名(75%)、2)『意欲低下』9名(75%)、3)『不規則な生活』8名(67%)、4)『将来設計の問題』8名(67%)、5)『勉強の負担』5名(42%)、『高い目標』5名(42%)であった。

軽度群の項目群別の集計によると、1)『人間関係の問題』9名(64%)、2)『意欲低下』10名(71%)、3)『不規則な生活』8名(57%)、4)『将来設計の問題』8名(57%)、5)『勉強の負担』9名(64%)、『高い目標』1名(7%)であった。

E. 考察

1. 対象群の特徴について

結果について考察する前に、大学生を対象にした調査を行う場合の対象群の特性について検討する。個々の大学生は所属する大学の違い、学生の所属する学部の違い、性別の違い等、さらには性格、生育歴、価値観など様々な異質性を持っている。一方彼らは大学生という立場がもたらす共通性を備えている。大学生という社会的な立場はこれらの心理状態に高い均質性を与えていると考えられる。

大学生活がもつ共通の内容として以下の点を指摘できる。第1に単位を取って卒業しなければならないという課題を学生が背負っている点である。この達成課題が学生にもたらす困難の程度は、大学や学部によって異なっていて一律に論じることは難しい。しかし大学生が試験を受け、レポートを提出して単位を取らなければならないという枠組みの中に置かれていることは共通している。第2に卒業後は大多数の学生が職業に就くという課題を抱えている点である。大学生は思春期・青年期の最終段階にあたり、勉強の終了と社会参入という人生において重要な目標が目前に迫っている。青年が達成すべき課題が具体的で明確な目標として意識される時期であり、しかもそれが進級・卒業という明確なタイムスケジュールに従って進行する場が大学である。大学生は同じ目標や課題を共有する心理的に均質性の高い集団を形成し思春期・青年期の中でも際立って明確な特徴を共有する集団である。大学生は心理的には主要な関連要因が統制された均一性の高い集団と言えるのではないだろうか。

大学生の生活は個人を評価するための様々な物差しを持っている。大学生には勉学、クラブ活動、サークル活動、アルバイト、友人との交際、趣味、下宿生活などの多様な活動領域がある。高校までの受身の生活とは異なり、自分から関与する領域を選択し活動することが求められる。個人の特性が露になる環境である。これらの環境の特徴は、心理的問題を検討する場合の背景として重要な意義をもつものである。本人の直面している状況と

図6 軽度群 項目出現頻度(その1)

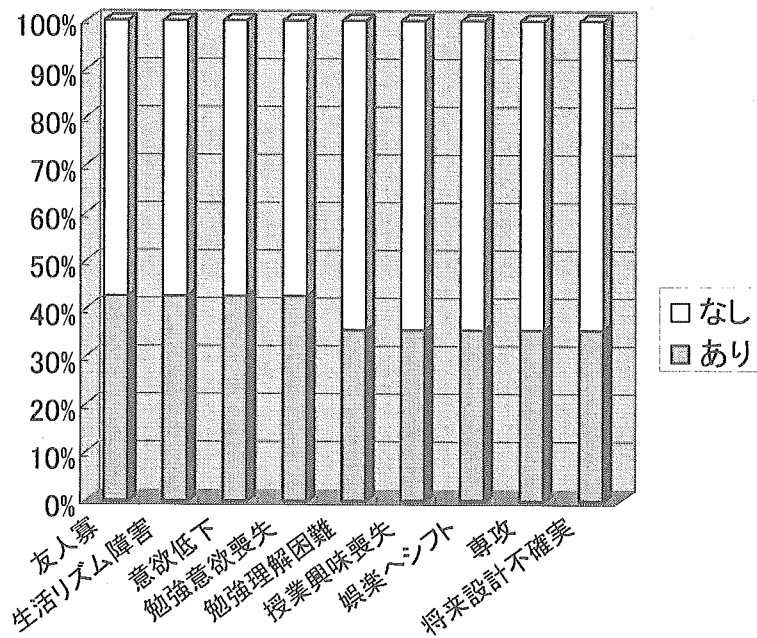


図7 軽度群 項目出現頻度(その2)

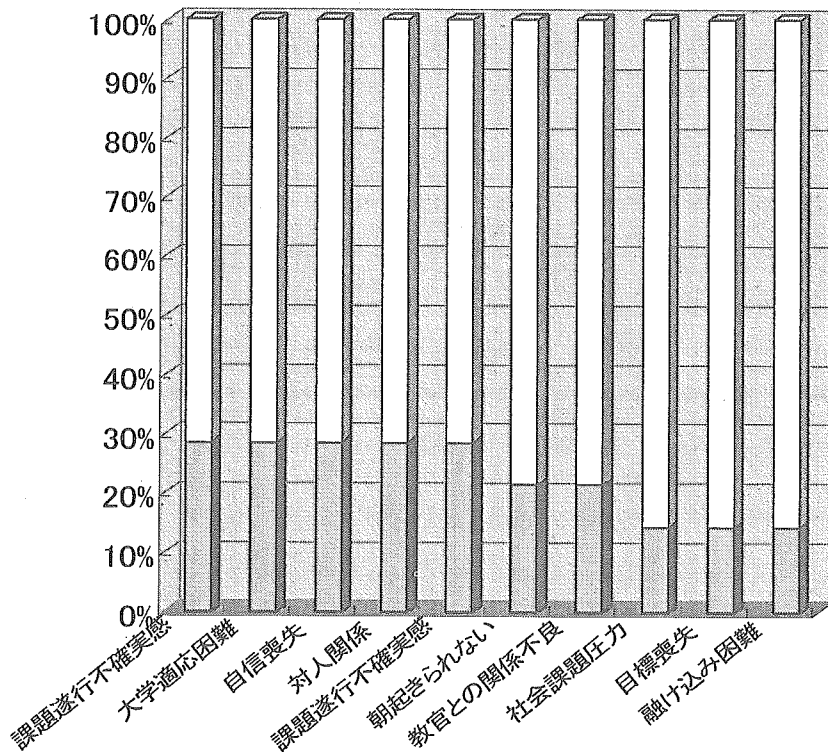


図8 中度群 項目群別出現頻度

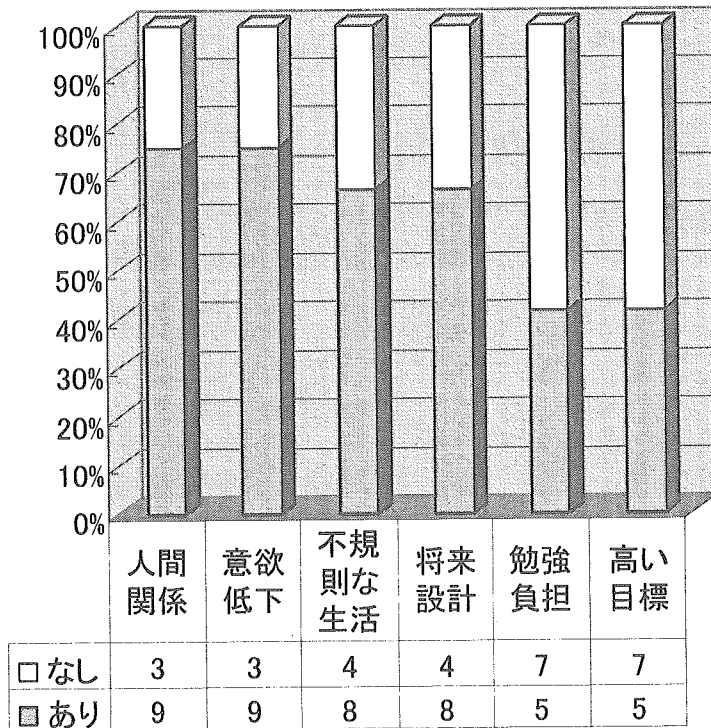
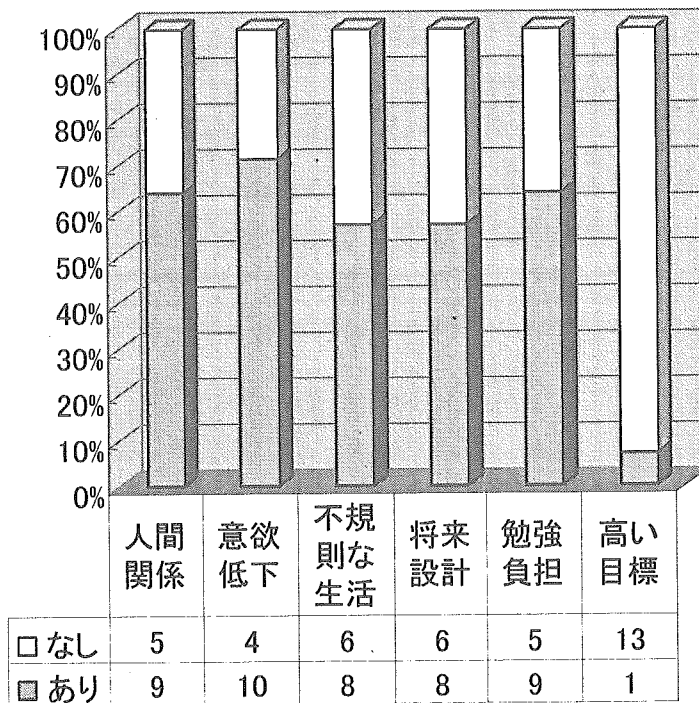


図9 軽度群 項目群別出現頻度



その達成度を聞くことによって、本人の現状を評価・判断することが可能となる。青年としての活動が目に見える形で把握できる場が大学である。

本研究の対象には偏りがあるものの、青年期後期の発達段階にいる大学生であるという共通性を持っている。その基盤にあるのは青年期から成人期に移行する時期の困難であり、それは大学生に限らず同世代の若者が直面する課題でもある。

2. 問題項目から見た「ひきこもり群」が抱える心理的問題について

項目別に見ると最も多い訴えが「友人が乏しい」7名(54%)であった。本人の口から明確に語られた事例のみがカウントされているので、実際にはさらに多い可能性がある。大学のキャンパスでは多くの学生が友人グループを作って共に行動している。授業のレポートやテスト勉強では互いに助け合い、食事の時間や授業の合間を共に過ごし、同じクラブやサークルに所属して活動するなど、友人の果たしている役割は大きい。大学生活の中で生じる様々な問題について相談相手になり、不安を分かち合い、楽しさを共有しあう友人の存在は大学生活の充実度に大きく影響している。友人が乏しいと訴えるひきこもり群の学生の中には、キャンパス内で話し相手が一人もいなくて孤立している事例もある。

クラスが常に集団として行動する高校では、同じ教室にいただけで、クラスへの所属感を感じることができる。ところが授業は選択制で一人一人が独自のカリキュラムを持っている大学では高校とは全く事情が異なっている。授業を受けてもクラスの一体感を味わうことはない。サークル活動にも参加しない、アルバイトもしない学生には仲間を得る機会が乏しい。個人の自由が尊重されている大学では自ら友人を作ることができなければ、孤立せざるを得ない。一日大学にいても誰とも話さないと語る学生もいる。「友人が乏しい」という訴えは、ひきこもり学生の大学生活が彼らに人間関係の充実感や満足感を与えていないことを示唆する項目であり、精神的に孤立する状況が有ると

すれば、登校意欲を低下させる大きな要因となっていることを示唆している。人間関係がない大学生活は決して楽しいものではない。人間関係を作るにはどうすればよいかという問題に日々直面し悩まされ、あるいはそのために低い自己評価を持って悩むことになる。

ひきこもりは家族以外の人間関係から遠ざかることである。ひきこもりの学生はひきこもることで、自分が抱えている人間関係の問題を解決する道を閉ざされてしまう。人間関係の問題を解決する機会を奪われ、社会参加の過程を進むことがさらに困難になっていると考えられる。ひきこもりの学生に対する支援の中で人間関係をいかに築いていくかというテーマが重要な問題であることを示す結果である。現在行われているひきこもりの支援活動において、グループ活動など人間関係を体験し、構築していく場が用意されている。人間関係の構築への道を設けることはひきこもり支援において中核的な問題であることをこの結果は示している。

ひきこもり群における人間関係の悩みの出現率をA大学の一般学生全体における人間関係の悩みやの出現率と比較したい。比較するデータは入学時に新入生全員に行ったアンケート調査である。自記式の調査であり、対象の年代が本件研究の対象群に比べると低く、厳密な意味では比較できないが、参考にはなると考えられる。平成13年度入学者名に行ったアンケート調査⁷⁾(回答者2575名、回収率96.6%)によると、悩みの有無についての設問に対して、「友人関係の悩み」があると答えたもの9.4%であった。最も多い悩みが「進路」11.4%、2番目が「専攻」9.5%、「友人関係の悩み」が第3位9.45%であった。青年期は精神的に大きな変化を体験する時期であり、人間関係も青年の主要な悩みの一つであると考えられるが、「ひきこもり」学生における「友人が乏しい」とう問題の出現率54%に比較すると、入学時の学生における人間関係の悩みを持つ学生の割合9.4%で、はるかに低いことが分かる。「ひきこもり」群における友人に關係の悩みは「ひきこもり」状態の形成に関

与する重要な要因であると考えられる。人間関係の問題が重要であることは、「ひきこもり」群の項目の上位に人間関係の問題が集中していることから明らかである。上位5項目を見ると、人間関係の問題が3項目（「友人が乏しい」、「対人関係の問題」、「融け込めない」）含まれていた。他の二つは将来に関する問題「将来の目標不確定」と大学適応の問題「大学適応困難」であった。

上位10項目を見ると、対人関係、将来の問題、勉強の問題など、学生生活の様々な面に関する問題が含まれていた。「友人が乏しい」7名(54%)、「対人関係の問題」5名(38%)、「将来の目標不確定」5名(38%)、「融け込めない」5(38%)、「大学適応困難」4名(31%)、「課題遂行不確実感」4名(31%)、「娯楽ヘシフト」4名(31%)、「社会参加の圧力」3名(23%)、「自信喪失」3名(23%)、「意欲低下」3名(23%)、「授業興味喪失」3名(23%)、「勉強理解困難」3名(23%)、「立ち遅れ感」3名(23%)となっていた。

いずれの問題も学生個人にとっては切実な悩みとなり得る問題であるが、大学生であれば誰もが大学生活において体験する可能性のある問題であり、稀な体験や特別な出来事は認められなかった。「ひきこもり」が特別の要因から生じる現象ではなく、ひきこもり学生がもつ悩みは一般の学生にも見られる問題と共通のものであることを示す結果であった。

3. 項目群からみた「ひきこもり群」の特徴について

細かい項目を類似の内容ごとにまとめて「項目群」として集計し、ひきこもり群の心理的問題の大きな傾向について検討した。その結果は、『人間関係の問題』11名(85%)、『勉強の負担』7名(54%)、『不規則な生活』7名(54%)、『意欲低下』6名(46%)、『将来設計の問題』5名(38%)、『高い目標』4名(31%)であった。

最も出現頻度が高い項目群は『人間関係の問題』であり11例85%であった。ひきこもり群の大多数に人間関係の問題が認められた意味は大きい。

人間関係の絆の有無は大学生活を大きく左右する。仲間の存在は問題に遭遇したときそれを乗り越えるための力をかりることができる。一方で対人関係の欠如は、仲間からの支援が得られないために問題の解決が困難になる場合があるだけでなく、孤立していることがそれ自体大きなストレスになっている⁹⁾。対人関係は自己評価を支える重要な要素であり、対人関係の欠如は高い自己評価を持ちにくくする。キャンパスでの孤立状態は大学生活から楽しみや充実感を得ることを難しくし、大学生活の魅力を減じることになる。「ひきこもり」状態とは自分を支える人間関係の絆を持っていない状態であるとも言える。今回の調査は「ひきこもり」のもつ意味に再度注意を促すものであった。ひきこもり群において『人間関係の問題』の項目群が高い値を示す結果から推測されるのは、人間関係の乏しさが「ひきこもり」状態に先行する重要な問題であることということであった。

次に多く見られた問題は『勉強の負担』と『不規則な生活』であった。どちらも54%の事例に認められた。『勉強の負担』は、「勉強理解困難」、「課題遂行不確実感」、「自信喪失」、「社会参加の圧力」などの項目を含んでいる。勉強内容が理解できない、レポートや宿題が不十分にしかできない、勉強の自信がなくなった、就職活動の負担など大学生として達成すべき課題が十分にできていないことが負担になっている状態である。ひきこもり群の54%が現実的な困難に直面していることが示されている。ひきこもり状態を形成する要因の一つは現実的な課題達成の困難にあることが示されている。決して心理的な悩みや葛藤だけが重要なのではなく、課せられた勉強課題を習得できるかどうかという問題で躓いている学生がおよそ半数に達していた。このことは、「ひきこもり」の予防ないし、早期対応に一つの示唆を与えるものであろう。勉強が分からない学生への指導体制、キャリアカウンセリングによる社会参加への指導などを必要としている学生がいることを示す結果であった。

『不規則な生活』は「朝起きられない」、「生活

リズム障害」、「娯楽ヘシフト」などの問題が含まれ、授業を受けるために必要な生活の規則性が失われている。54%に出現しており、約半数の事例において『不規則な生活』が生じている。この状態はひきこもり状態に先行して生じて、ひきこもりのきっかけになった場合もあれば、ひきこもりに付随して二次的に発生したと考えられるものもあった。不規則な生活の改善が大学に復帰するための具体的な目標として重要であると考えられた。

『意欲低下』も約半数の46%に認められている。『意欲低下』は「勉強意欲喪失」、「授業興味喪失」、「全般的な意欲低下」等の項目を含んでいる。勉強への意欲低下は事例ごとに様々な内容を持っている。勉強が分からない、勉強への興味を失った、あるいは勉強に限らず何事にも意欲がない等内容は多岐にわたり、原因については医学的な診断も含めて事例ごとの要因を十分に考慮して対応することが求められている。約半数に出現している「意欲低下」の問題は看過することができない、ひきこもりへの対応の重要なポイントであると考えられる。

『将来設計』の問題は38%に認められた。「将来設計不確実」、「専攻の問題」、「目標喪失」等の訴えが含まれている。学生は自分の『将来設計』を卒業までに明確にすることを求められているが、必ずしも決められた年限内に決定できるとは限らず、さらに時間がかかる場合がある。自己同一性の探求が長期にわたり青年期が延長している学生がいる。

また『高い目標』が約3分の1の学生(31%)に認められた。要求水準が高く、失敗を恐れて自己像が傷つく恐れのある場面を回避する。学会発表や卒論の発表会などでプライドを傷つけられたことがきっかけで大学を休む事例がある。対応としては、高すぎる目標を訂正し、現実的な自己像を受け入れることによって、より現実適応的な行動をとれるようになることが期待される。しかし、そのような自己変革を自分で達成することは容易ではなく、自己愛の傷つきが「ひきこもり」のき

っかけになっている。自己像の訂正はカウンセリングや仲間体験を通して達成されるものと考えられる。

引きこもり群に高い頻度で見られた項目群はいずれも、大学生の生活の中で生じることが了解される問題であった。

4. 3群の比較

(1) 項目の比較 (表7)

3群はそれぞれ以下の特徴をもっている。「ひきこもり」群は社会活動、対人関係、行動範囲のいずれの領域においても機能領域が狭小化しており、いわゆるひきこもりに該当する事例である。ただし、持続期間が6ヶ月未満の学生が13例中4例含まれている。中度群は引きこもりの定義からは外れるが、社会活動、対人関係、行動範囲が中程度に制限されている。外出する、あるいは学校の呼び出しに応じる、あるいは訪問者や友人に会うなど、部分的にひきこもりの要件を満たしていない。「ひきこもり」の不全形であると見なすことができる。軽度群は登校していないが、サークル活動あるいは、アルバイトを行い、友人には会い、外出もしている。

「ひきこもり」群と、「ひきこもり」群に比べると何らかの活動を見せている中度群、継続的な登校はしていないが、他の活動をしている軽度群の問題項目にどのような内容の違いがあるのか、「ひきこもり群」、「中度群」、「軽度群」が抱えている心理的要因の異同について検討する。「ひきこもり」群と中度群、軽度群それぞれの項目を比較した。「ひきこもり」群と中度群の上位10項目を比較してみると、6項目が共通していた。「ひきこもり」群と軽度群の上位15項目を比較するとやはり10項目が一致していた。

中度群と軽度群は15項目中10項目が共通していた。3群の項目を比較すると上位項目の3分の2が同じであった。3群の心理的問題は共通する部分が多いことが推測される。

中度群や軽度群にも引きこもり群と同様の項目が多く認められた。3群は類似の問題を抱えてい

表7 重症度別項目日人数

	友人が 乏しい	将来設計 不確実	対人関係	娯楽へシ フト	勉強意欲 喪失	意欲低下	専攻	授業興味 喪失	勉強理解 困難	大学適応 困難
軽度群	6	5	4	5	6	6	5	5	5	4
中度群	5	7	8	7	7	4	6	5	3	3
ひきこも り群	7	5	5	4	2	3	2	3	3	4
計	18	17	17	16	15	13	13	13	11	11

	意欲低 下	融け込み 障害	生活リズ ム障害	自信喪失	課題遂行 不確実感	社会課題 圧力	目標喪 失	教官との 関係不良	成績拘泥	研究室不 適応
軽度群	6	2	6	4	4	2	2	3	1	1
中度群	4	5	3	3	0	1	3	1	2	2
ひきこも り群	3	5	2	3	4	3	1	1	1	1
計	13	12	11	10	8	6	6	5	4	4

	立ち遅 れ感	自己愛傷 害体験	万能感	社会所属 意識寡少	学会発表	成績低下 衝撃	大学と の相性	他人が上
軽度群	1	0	1	1	0	1	1	1
中度群	0	2	2	2	0	0	0	0
ひきこも り群	3	2	0	0	2	1	0	0
計	4	4	3	3	2	2	1	1

ると考えられる。

(2) 項目群の比較 (図 10、図 11、図 12、図 13、図 14、図 15)

各項目群の出現頻度について3群の比較を行った。(3群における各項目群の出現率に統計学的有意差は認められなかった。)

3群の1位はいずれも『人間関係』であり、ひきこもり群 85%、中度群 75%、軽度群 64%であった。

『高い目標』は3群ともに最も低く、ひきこもり群 31%、中度群 42%、軽度群 7%であった。

『意欲低下』は、ひきこもり群 64%、中度群 75%、軽度群 71%であり、『将来設計の問題』はひきこもり群 54%、中度群 67%、軽度群 57%であり、どちらの項目もひきこもり群が他の2群より低い値を示した。

『不規則な生活』はひきこもり群 59%、中度群 67%、軽度群 57%、『勉強の負担』はひきこもり群 54%、中度群 42%、軽度群 64%であり、ひきこもり群は他の2群の中間の値を示しており、特に他の2群との大きな違いは認められなかった。

以上項目群の比較によるとひきこもり群が他の2群に比べて特別高い値を示したものは認められなかった。

5. 発達課題との関連

項目群の意義について検討する。相談の中で訴えられた問題項目を分類して6つの項目群にまとめることができた。

ブロス¹⁾は青年期後期には「感情と意思の統一」の課題に直面すると指摘している。学生は自分に対する願望と自分の現実的な限界との間に折り合いをつけることを求められている。「高い目標」が問題となっている一群の学生がいる。彼らは理想の自己にこだわり、自己愛が傷つく場面を回避する。理想像あるいはあるべき姿にこだわり現実的な自己評価を受け入れることの困難さを示している²⁾。彼らは肥大している理想の自己を現実にしたものに変更することが求められている。現実

との調和した生き方を獲得することが必要である。

「人間関係」の問題は自己像や自己評価に最も重要な影響力をもっていると考えられる。大学での孤立などの人間関係の困難さは低い自己評価へつながる。かれらには青年期後期に確立すべき精神的自立や社会的個人としての自己の確立の過程において困難が生じている。「高い目標」、「人間関係」群は精神的成熟の課題に直面している青年期後期の学生に生じた困難として理解することができる。

「将来設計の問題」、「勉強の負担」は職業アイデンティティの獲得の過程に関連する項目である。社会的に自己を位置づけるという青年期の課題に学生は直面している。「将来設計の問題」は自分の進路を定める過程の停滞を示している。青年期後期は人生の行路を明確に定める時期である。将来設計の問題は社会参加の過程において困難にぶつかっていることを示している。青年期後期の活動の最終目標が決定されない状態は大きな負担となっていると考えられる。目標の不確定は不安と混乱を引き起こす要因となる。

「勉強の負担」の問題は卒業、就職の一連の課題の中で直面している現実的な困難を示している。

「将来設計の問題」、「勉強の負担」は青年期後期から成人期へと続く道を進む過程に生じた問題であり、広い視点で見れば職業的アイデンティティの獲得過程の停滞・困難を示すものである。

「意欲低下」は勉強や課外活動等を停滞させ、発達課題の達成の大きな障害となる。また逆に発達課題の達成困難が大きな壁になって「意欲低下」を引き起こしている場合もある。精神医学的関与を求めて改善を要する問題である。

「不規則な生活」は「ひきこもり」の発生の要因でもあり、「ひきこもり」を持続させる要因にもなっていると考えられる。「意欲低下」、「不規則な生活」は「ひきこもり」の発生の関与する要因となることもあり、あるいは「ひきこもり」に付随して二次的に意欲低下が生じる可能性もある。

心理的問題として訴えられた項目を整理し、6つの項目群にまとめた。項目群が示す内容は、精

図10 人間関係の問題

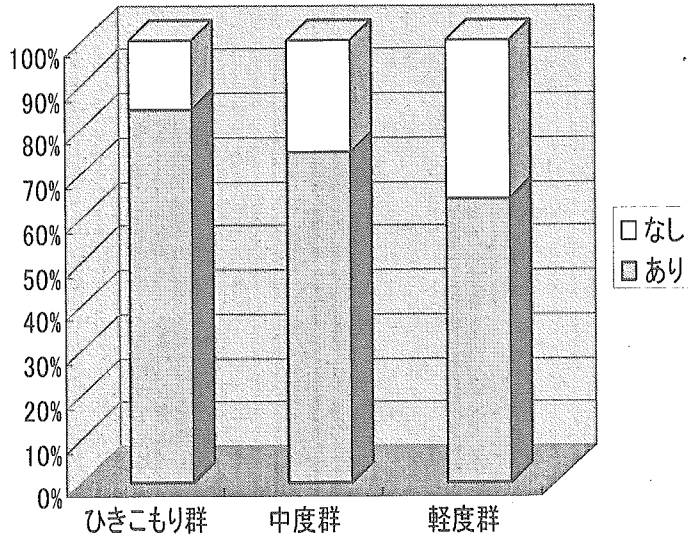


図11 高い目標

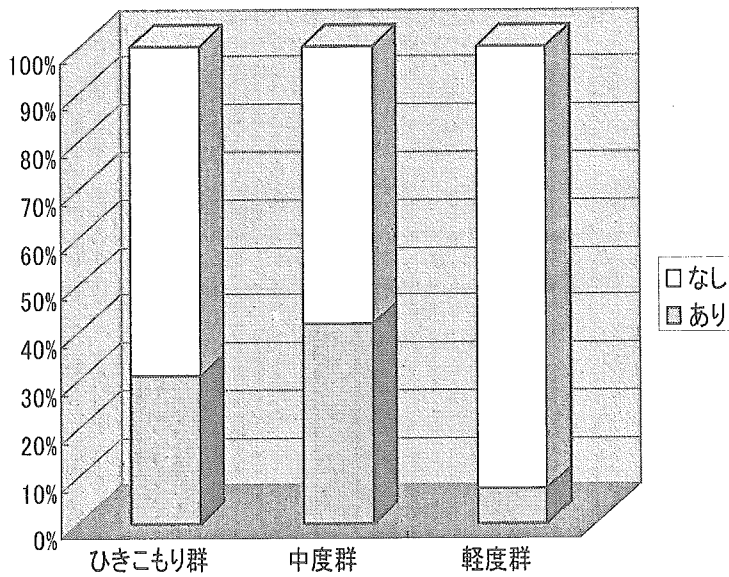


図12 意欲低下

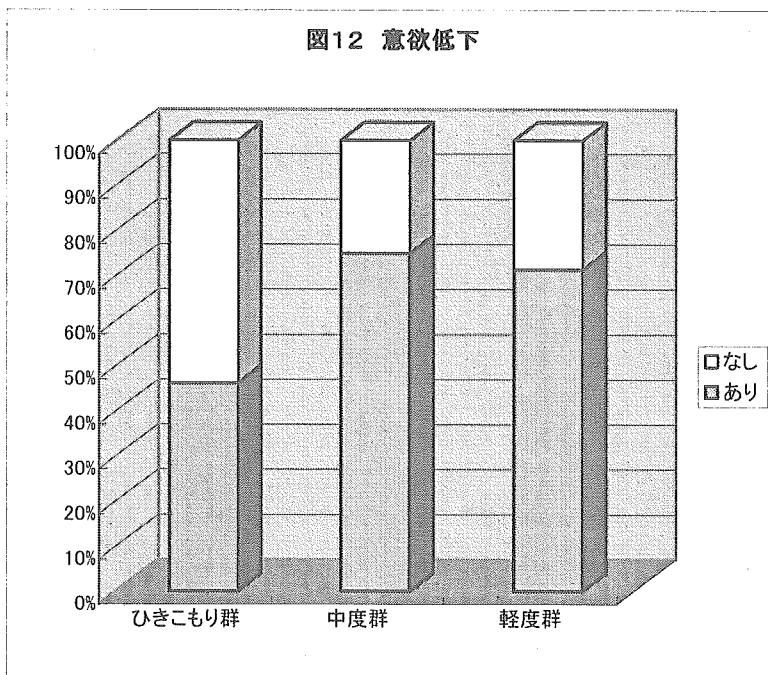


図13 将来設計の問題

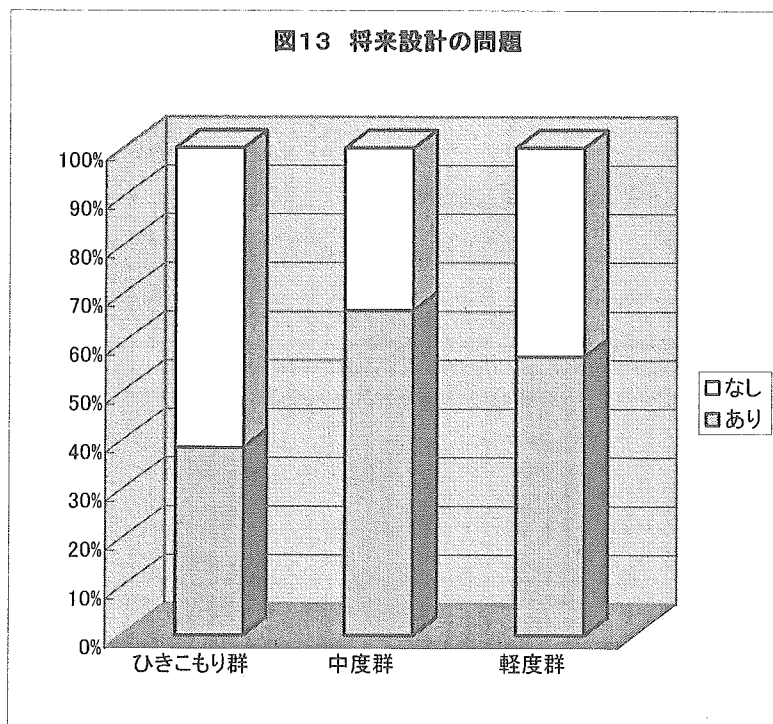


図14 不規則な生活

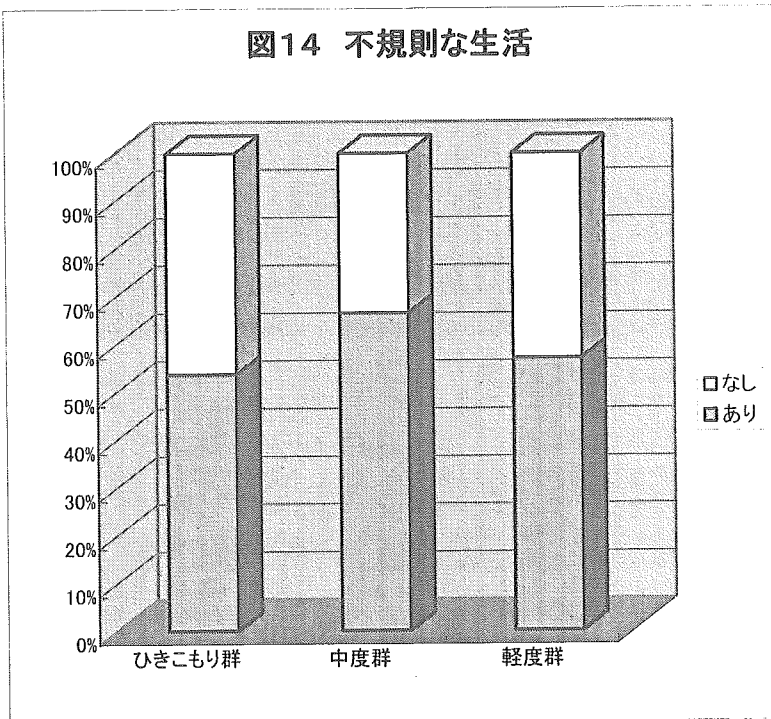
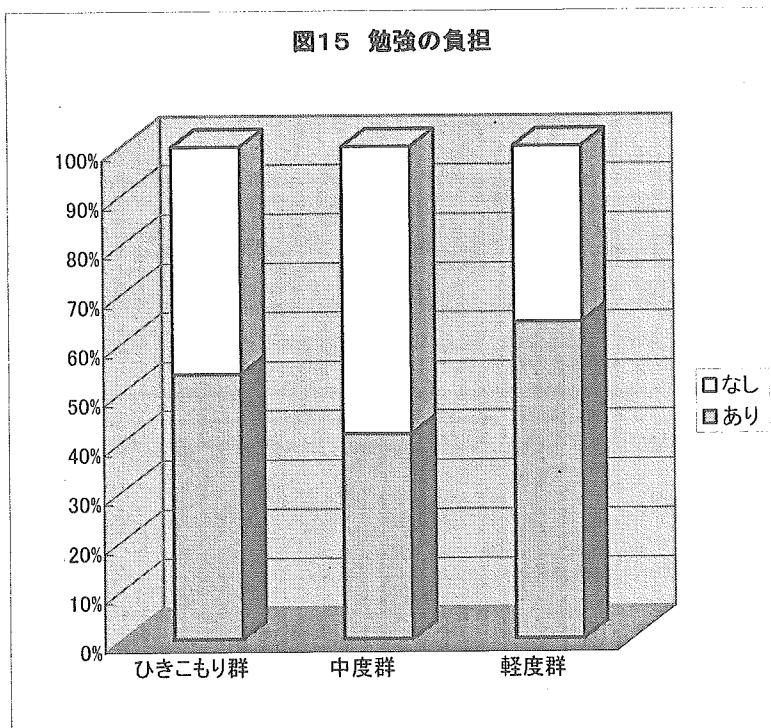


図15 勉強の負担



神的成熟、職業アイデンティティの獲得といった青年期後期の発達課題達成の困難を示すものであった。「意欲低下」や「不規則な生活」は「ひきこもり」を発生させる要因にもなり、また「ひきこもり」に伴って二次的に生じて、「ひきこもり」を持続させる要因にもなっていると考えられる。これらの要因はひきこもりとの間に閉鎖した悪循環の回路を形成する可能性がある¹⁰⁾。

6. ひきこもりの形成要因について

ひきこもりは一つの状態像をあらわす言葉であり、個別の症例への対応は個別の事例の語りに耳を傾け、問題を理解し、発見していく過程が必要である。事例への援助の報告によると、ひきこもり支援に必要な対応の多様性が認められる。サポートの現場からの報告¹¹⁾によると、「不安緊張感 パニック障害 強い対人緊張感 対人恐怖症状」といった精神医学的症状、「強い挫折体験 自信喪失感 将来に展望を持ちにくい」といった日常の活動の達成度の悩み、「意欲低下、集中困難」といった精神症状あるいはサブクリニカルなレベルの問題、「将来設計が描きにくい、誰からも評価されないという不安、競争によって勝つこと」など社会に生きる中で直面する問題、など精神医学的問題から社会に生きることの問題など様々なレベルの問題が指摘され、それらの問題に応じた支援の必要性が指摘されている。これらに対する支援は当然多様なレベルでの努力・工夫を必要としている。「安心できる居場所 出会いや交流 出かけるのが楽しい場所 コミュニケート出来る場所」を設けること、「成長への協力 原因追求や診断は行わず現存主観の全面的了解により心理的安定を図る」、「感情を言語化してもらおう、他者の思惑を気にして誰にも語れない思いを語ってもらおう」など対応方法への配慮、「繊細な感性や傷つきやに焦点を当て、自己否定感を軽減し、自己を肯定的に受け止められるようにする」などの内的な自己像の改善を重視する個人面接による対応、「収入になる活動」を支援するなど、ひきこもりの支援は多様な立場と方法論からの方策をシステムとして用意

して、各事例に適切な支援を行う。このとき、事例のもつ困難に対するアセスメントが重要である。対応する担当者の立場、方法論、ひきこもりへの理解によって事例のどの部分にまず注目し対応していくのかが決まる。アセスメントをできるだけ客観的で共有できるものにするのがひきこもりへの対応に必要である。

社会的レベル、心理学的レベル、精神医学的レベルでのアセスメントが必要である。心理学的レベルのアセスメントは心理学的な所見の把握とその理解が基盤となり、その理解の上に立って対応方法が決定される。ひきこもり状態が生じることに関連したと考えられる心理的要因の理解がまず求められる。そして、心理的要因はその若者がどのような発達課題に直面していたのか、どのような問題が重要であるのかの判断が役に立つ。各事例においてひきこもり状態が形成されるに至った過程に関与したと考えられる心理的要因の理解を支援者が持つことは支援活動の基盤として重要である。

本研究は青年期後期事例における具体的な心理的要因について調査し集計した。その内容について考察した。

まとめ

大学学生相談室に来談した学生の中で、大学を休んでいることが主要な相談内容の一つとなっている者 39 名を対象として相談内容を項目別に集計し、「ひきこもり」に関連する心理的要因について検討した。対象を社会活動、対人関係、行動範囲の程度に応じて 3 段階に分け、得点に応じて、「ひきこもり」群、中度群、軽度群に分けて検討した。

それぞれの群が抱えている心理的問題項目については、項目内用は共通しており、ある群にのみ特異的に出現する項目は認められなかった。類似の項目をまとめて、項目群に整理したところ、人間関係問題、意欲低下、不規則な生活、将来設計の問題、勉強の負担、高い目標の 6 つの群にまとめることができた。

ひきこもり群に認められた心理的問題は中度群や軽度群にも認められた。これらは青年期固有の発達課題と関連をもつ問題として理解することができた。「ひきこもり群」および「中度群」、「軽度群」の抱えている心理的問題の内容を比較すると、「ひきこもり」群は質的に異なった問題を抱えた一群ではなく、青年期に見られる困難が継続的に存在している事例であると考えられた。

青年期後期の「ひきこもり」事例に対する心理的援助については青年期発達課題の理解を前提にして考えるべきである。

今後の研究の課題

大学生の場合、所属研究室からの紹介などのルートがあるために、比較的早期に相談のルールに乗る事例があり、二次反応が生じていない早期の「ひきこもり」例と考えられる事例も多い。中度群や軽度群はひきこもりと共通の心理的問題を持っており、ひきこもり群の初期段階に類似の問題を呈していると考えられる。これらの群への対応法の検討はひきこもりに対する早期対応にも関連する問題であると考えられる。

ひきこもりの早期例については従来あまり検討されてこなかった。次年度は大学生の事例の特徴を生かし、比較的早期に相談のルールに乗った事例、あるいはひきこもり状態が短期間である事例を対象にして、ひきこもり事例の対応法について研究したい。また精神医学的診断との関連についても検討を加えたい。

参考文献

- 1) Bloss, P. :
- 2) 井上洋一：阪大生のprofile 大阪大学健康体育部・保健センター・学生相談室 2002
- 3) 伊藤順一郎、吉田光爾、小林清香ほか：「社会的ひきこもり」に関する相談・援助状況実態調査報告。厚生労働科学研究、こころの健康

科学研究事業、「地域精神保健活動における介入のあり方に関する研究」（主任研究者：伊藤順一郎）総合研究報告書 2003

『平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金心の健康科学研究事業、地域精神保健活動における介入のあり方に関する研究—10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン（最終版）』 2003

- 4) 伊藤順一郎、吉田光爾：ひきこもりガイドラインの反響と意義 心の科学 123 : 17-24, 2005
- 5) 笠原嘉 :
- 6) 近藤直司：ひきこもりケースの現状と精神医学的理解。近藤直司、長谷川俊雄編：青年のひきこもり。萌文社 10-45, 1999
- 7) 近藤直司：青年期のひきこもりをめぐる臨床研究の課題 2005 年度版・児童心理学の進歩（金子書房）、東京、2005
- 8) 松本 剛：大学生のひきこもりに関連する心理特性に関する研究。カウンセリング研究 36 (1) : 38-46, 2003.
- 9) 村瀬孝雄：退行しながらの自己確立 笠原嘉、山田和夫編「キャンパスの症状群」pp209-232, 弘文堂、東京、1981
- 10) 斎藤環：社会的ひきこもりの現状と展望 思春期青年期精神医学, 12 : 13-20, 2002.
- 11) 斎藤環監修：hikikomori@NHK ひきこもり。NHK 出版、東京、2004
- 12) 諏訪真美、鈴木國文：「一次性ひきこもり」の精神病理学的特徴。精神神経誌 104 (12) : 1228-1241, 2002

F. 健康危険情報

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

高校生の不登校・中途退学——ひきこもりに視点をおいた調査研究

分担研究者 北村陽英

奈良教育大学・教育学部・学校保健研究室

研究要旨

高校不登校や退学の多くが引きこもりになることが予想される。高等学校における、不登校、中途退学生徒等の実態を把握することを試みた。2004年度在校の高校生徒17,211名について、養護教諭を通じて、長期欠席、不登校、保健室登校、退学生徒数等を調査した。その結果、長期欠席生徒は在校生の1.1%を占め、1,2学年に多くみられた。不登校生徒は、在校生の1.2%を占め、第1学年に非常に多く50.5%を占めた。保健室登校は在校生の0.2%を占め、各学年においてほぼ同数であった。中途退学生徒は在校生の1.2%を占め、1,2学年の退学が多くみられた。

長期欠席、不登校、退学生徒の中に「ひきこもり」生徒がいると思われる。不登校を「ひきこもり」ととらえると、在校生の1.2%が「ひきこもり」といえる。1,2学年に長期欠席、不登校や中途退学が多いことから、不登校が長期にわたったために中途退学した生徒が多いと思われ、退学生徒の中にも「ひきこもり」が多くいたと予想される。実際には、中学校から高校へ進学しなかった「ひきこもり」もいると思われ、この世代のひきこもり青年は、この数値を上回ると考えられる。

A. はじめに

1) 不登校の推移

文部科学省による小学校・中学校を対象とした不登校児童生徒統計の1966年から2004年までの間について、その出現率を図1に表した。尚、不登校日数については1966年から1990年までは年間の出席すべき日数のうち50日以上欠席した者、1991年から2004年は30日以上欠席した者のデータである(1)。

高等学校は義務教育ではないためか、その不登校統計は見あたらなかった。しかし、

文部科学省は2005年9月22日に2004(平成16)年度「生徒指導上の諸問題の現状」をまとめ(2)、今回初めて高校での不登校生徒数を調査した。その結果、国公私立全体で高等学校不登校生徒は67,500人(1.82%)いることが分かった。また、不登校生徒のうち、36.6%が中退しており、不登校がそのまま高等学校中途退学に結びつきやすいことが明確になった。また、2004年度長期欠席高校生110,287人中、中学校時代に長期欠席の経験が